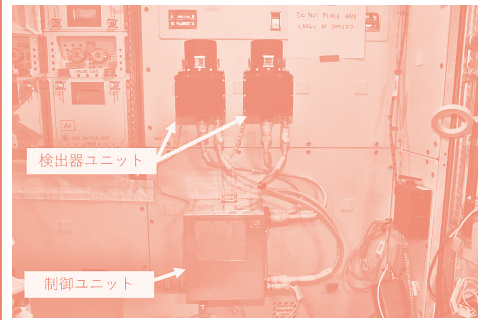


Newsletter 39

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第39号/2021年11月30日発行

Contents

- 巻頭言 教養の先にあるもの
- 特集Ⅰ 「基盤研究」「日吉行事企画運営委員会 (HAPP) 企画」
- 特集Ⅱ 「日吉行事企画運営委員会 (HAPP) 企画」「学習相談」
- 特集Ⅲ 【教養研究センター設置科目】 身体知・音楽／人文科学特論Ⅱ (身体知)／日吉学
- 特集Ⅳ 「日吉キャンパス公開講座」「アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ」
- 特集Ⅴ 「研究の現場から」「情報の教養学」
- 活動予定
- 私の〇〇自慢



国際宇宙ステーション・日本実験棟「きぼう」(JEM)内に設置された、宇宙放射線線量リアルタイム実測器 PS-TEPC (Position-Sensitive Tissue-Equivalent Proportional Chamber) の写真。中央上部の黒い箱2つが、検出部で、その下の銀色の箱が制御部。Google street viewでも確認できます。
<https://iss.jaxa.jp/kiboexp/equipment/pm/pstpec/topics1/> より引用 (2021.10.31)

教養の先にあるもの

教養研究センター副所長
 寺沢和洋 (医学部)
 Kazuhiro Terasawa

2020年10月より教養研究センター副所長に着任致しました。教養研究センターとは、2010年の後期より、同センターが主催する「日吉キャンパス公開講座」の委員として、2018年からは、同運営委員長として関わって参りました。

教養とは一体何なのかについて、色々な考え方や捉え方があるかとは存じますが、健全に生きるためのカギ・手段は時代と共に変化し、それらの賞味期限が徐々に短くなる一方で、普遍的な要素の1つとして、まず試合に参加するために(参加しながら)、世の中(自然界・人間界)のルールを知ること(現状把握)が肝要で、そのための教養であると捉えております。

例えば、プロ野球でとてつもない試合数をこなしていたとしても、(末端の)ルールを知らなかったがために、(とっさの)手段を誤り、痛手を食うこともあります。また、研究の最先端付近で、試行錯誤を繰り返し、答えらしきものを見つけようとしたときに、事前に役立つとわかっているわけではなく、思わぬ時に、或いは、必要性を感じた時に立ち戻って、役立つことができるのも教養といえるでしょう。

日常生活の中でも、越境して、他分野に足を踏み入れざるを得ないような状況に陥ることはもはや必然で、そのような時に、一層、教養のありがたさを感じるのでしょうか。

異なるものを結びつけるというのは、物事を把握するプロセスの最初の部分であると思っています。「わかる」とは、ベン図の中央部分の重なり(既存の知識と学びとの重

なり)が存在し、「わからない」とは、その重なりが存在しないことを指すとイメージしています。理解の助けになる要素(教養)を多く抱えていると、食わず嫌いの特定の分野を排除することも少なくなりそうです。学生時代に、先生が雑談を始めた途端に眠気が覚めたのは、ベン図の中央が現れるからだと思っております。

2016年末より1.4年に渡って、共同研究を通して、国際宇宙ステーション上での宇宙放射線線量リアルタイム実測を行いました(上右図参照)。R&Dと並行して宇宙環境への耐性チェックのための厳しい環境試験があり、その中で地上と同様のパフォーマンスを発揮するため複雑な仕組みや実績の(少)ない装置等は敬遠されがちですが、それをブレイクスルーし、ほぼ無傷での地上帰還とその後のパフォーマンスも維持し、例年の外部研究評価で実験課題代表者として、S評価をいただきました。

研究における「専門性が深い」とは、多くの知識・知恵を持っていることに留まらず、物事のダイナミックレンジを知っていることに相当し、より高分解能で物事に当たることができ、それを柱とすることで、門外漢がその分野の専門家に勝てる要素も出てくるわけです。前述の公開講座もそうですが、アウトリーチ活動は、様々なバックグラウンドをお持ちの皆様に対して、分野横断的な内容を提供する機会でもあることから、越境のための現場検証的な役割もあります。特に理系の分野は興味を持ってもらえないことも必然的に多く、専門分野をお伝えしても、説明なしには事実誤認されることがほぼ常です。従って、一般向けに限らず、同分野の研究者以外にお話をする際には、誰しもが知っているような日常的な話題から始めて話を積み上げていく作業が必要で、ある意味、お伝えする相手によって、話の出発点やプロセスが異なり、そのための教養であるとも思っております(後述の公開講座の欄に続く)。



基盤研究

文理接続プロジェクト

2021年度の「文理接続プロジェクト」として、毎月一回の「文理接続研究会」を行っています。毎回（原則として金曜日の16:30~18:30）、あらかじめ指定した一名の提題者に「話題提供」を一時間程度行って頂いたのちに、その内容を出発点に参加者全員による自由な議論を一時間程度行っています。2020年度の秋学期から現在の形で研究会を続けており、2021年度は、8月と3月を除く計10回の研究会を予定しています。今年度の共通テーマは2020年度と同じ「感染」ですが、直接的にそのテーマを扱ったものでなくても、文理の関係に関わる話題であれば良いということにしています。研究会の予定や活動記録はブログで公開しています (<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>)。参加者は教員や研究者・専門家などに限定していますが、外部に対して閉じた研究会ではなく、今年度は教養研究センター所員への告知をメールで行うなど、適度に開かれた会を目指しています。定期的に参加して頂けるメンバーを求めています。一回限りの参加も歓迎しています。以下が、今年度の第8回目までの「話題提供」のタイトルと担当者（敬称略）です。

【第1回】4月30日「ミシェル・セール『パラジット』

をめぐって／「寄食」から「感染」を見る」縣由衣子、外国語教育研究センター、現代思想。【第2回】5月21日「マルクススピーシーズ人類学からみた動物と人間の境界、そのゆらぎについて」宮本万里、商学部、文化人類学。【第3回】6月25日「科学系出版における文理接続」石田勝彦、(株)東京化学同人。【第4回】7月30日「宇宙放射線とメディアリテラシー、～コロナ禍は擬似宇宙?～」寺沢和洋、医学部、放射線研究。【第5回】9月24日「コロナをきっかけに考えるロボットとのセックスと恋愛」沼尾恵、理工学部、政治哲学。【第6回】10月29日『『いま言葉で息をするために』を読む(1)思想』荒金直人、理工学部、哲学。【第7回】11月26日『『いま言葉で息をするために』を読む(2)文学』小菅隼人、理工学部、英文学。【第8回】12月24日『『いま言葉で息をするために』を読む(3)歴史・宗教・人類学』宮本万里、商学部、文化人類学。

今年度は全てZoomでの開催を予定しており、毎回10名前後の参加者による活発な議論が行われています。ご関心のある方はぜひご連絡下さい。（荒金直人）



日吉行事企画運営委員会 (HAPP) 企画

『新入生歓迎行事「笠井勲舞踏公演：使徒ヨハネを踊る』』

20年以上続く新入生歓迎舞踏公演は、教養研究センター日吉行事企画委員会 (HAPP) とアート・センターの共催行事として実施されました。出演は、昨年に続き、笠井勲および天使館です。タイトルは『使徒ヨハネを踊る』。使徒ヨハネとは、新約聖書に登場する12使徒の一人です。イエスに最も愛された弟子とも言われています。笠井勲は、純白の衣装を纏い、笠井禮示による聖書の朗読を交え、時にバッハの「ヨハネ受難曲」を背景に80歳を過ぎた舞踏家とはとても思えないエネルギッシュな踊りを見せました。笠井氏は大学キャンパスでの行事ということ意識して下さり、聖書の信仰面よりも事実面に焦点を絞り、あらかじめ朗読テキストも提供していただきました。ご配慮に感謝しております。今回の踊りは『ヨハネ福音書』第1章第1節から始まりました。

世の始めに、すでに言葉（ロゴス）はおられた。言葉（ロゴス）は神とともにおられた、言葉（ロゴス）は神であった。この方は始めに神とともにおられた。一切のものはこの方によって出来た。出来たものでこの方によらずに出来たものは、ただの一つもない。（塚本虎二訳）

笠井勲は、その踊りを通して、私たちがこのコロナ禍という災害をどのように捉えるのか、コロナ禍から私たちがどのように「復活」するのか、言葉（＝学問）はその時ができるかという問題について、一つの手がかりを与えてくれたように思います。

今回の舞踏公演は、新型コロナウイルス感染症対策のため、無観客収録配信（12月24日オンラインにて公開）となりました。また、収録映像には、鑑賞の手がかりとなるように小菅隼人との対談を収めました。しかし、この素晴らしい踊りを学生にはライブで見せたかったです。曇天の肌寒い秋の午後でしたが、観客がない分、笠井氏は会場全部を使い、ダイナミックな動きを見せてくださいました。当然ながら、音楽著作権をクリアし、レコード会社の許可も取得済みです。昨年に引き続き、慶應義塾日吉キャンパスの教育研究活動にとって大きな成果になったと思います。（小菅隼人）



日吉行事企画委員会 (HAPP) 企画 春学期

「平家納経の世界—昇華する祈り」「義太夫節をひもとく—はじめての女流義太夫 (ジョギ!)」

ここに報告するHAPPの催しは、本来ならば2020年に開催する予定でしたが、コロナ禍に負けず、企画をさらにパワーアップさせて、2021年度にオンラインで開催しました(協力:アート・センター)。

●「平家納経の世界—昇華する祈り」は嚴島神社を舞台にした連続講演会。1回目(5月8日)は本学卒業生の荒尾努氏による古式の平家琵琶の公演、2回目(5月22日)は東京国立博物館の恵美千鶴子氏による国宝平家納経の講演。平清盛や平家の人々が築き上げた文化、平安末期のその水準の高さを確認すると共に、歴史にも多大な影響を与えてきた平家物語の世界を学ぶ契機としました。(企画:日本文化研究会)

●「義太夫節をひもとく—はじめての女流義太夫 (ジョギ!)」(6月21日)は春学期「芸術文化論I」のゲストスピーカーによる特別講演。江戸時代以降の文学・文化に影響した義太夫節の裾野の広さを、人形抜

きで演奏する女流義太夫で学びました。演目は「新版歌祭文」野崎村。義太夫節太夫は竹本越孝氏、三味線は鶴澤寛也氏・鶴澤賀寿氏。解説は早稲田大学の原田真澄氏。

学習効果を高めるため、両者ともに特設ウェブサイトを作り、教材を載せ、公演内容と共に好評を得ました。現在も平家琵琶・義太夫節の動画が見られます。ぜひご覧下さい。

<http://user.keio.ac.jp/~sakura/heike/>

<http://user.keio.ac.jp/~sakura/jogi/>

(津田真弓)



■ 学習相談

2021年度春学期活動報告

日吉図書館内でレポートの書き方などの相談に応じる学習相談は、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生がピア・メンターとして活動しています。今学期もコロナ禍の影響を受けつつも、56件のレポートや学習に関する相談に対応しました。また、大学の学習に役立つ情報を学生目線で発信するインスタグラム(@keiogakushusoud)も開設し、相談活動以外でも学んだ知識を他の学生に還元していく取り組みを行っています。

(日吉メディアセンター 今井星香)



今学期はコロナ禍ではありましたが、オンラインツールも活用しつつ活動を行いました。相談内容は論題の決め方がわからない、レポートの構成がわからないなど幅広いものでしたが、相談者と同じ立場の学生であることを活かし、相談に対応してきました。その中で、次にやるべきことが相談者の中で決まり、スッキリした顔を見られた時はやりがいを感じます。来年度もこのような場を絶やささないよう頑張っていきたいと思います。

(理工学研究科 修士1年 松尾佳奈)

<秋学期学習相談>

10月4日(月)~1月21日(金) 平日午後

日吉図書館1階スタディサポート(学習相談)またはWebex予約も受け付けています。

https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice

共催: 教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部

教養研究センター設置科目



身体知・音楽ⅠⅡ／人文科学特論Ⅱ（身体知）／日吉学「戦争編」

株式会社白寿生科学研究所寄附講座 身体知・音楽ⅠⅡ

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2021年度においては、可能な限りの通常化を目指して、株式会社白寿生科学研究所からの寄付による寄附講座として、2019年度と同じ数の授業を開講しています。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」です。昨年度（2020年度）は、春学期において、ほぼすべての授業がオンラインになってしまったということもあり、声楽の授業は休講となりました。器楽のクラスは、オンラインのフォーマットでしたが、個人レッスンを多用するなどして、履修者に学んでもらう環境を何とかして作ることができました。しかしながら、いつもであれば春学期の終わりに催す、器楽の小規模編成による成果発表演奏会は中止となってしまいました。これは、インターネットを通じて複数の奏者が同時に演奏をして、アンサンブルを行うというのが極端に困難であるためです。最新の技術でも、特殊な機器を必要とし、かなり安定的な通信環境を整える必要があるため、公演の中止は仕方なかったことでした。

2021年度においては、春学期の終わりの成果発表演奏会を秋学期開始時に開催することを予定していました。しかしながら、COVID-19のデルタ株の爆発的な感染拡大の影響もあり、10月から11月へ延期いたしました。結果、もともと秋学期終了時期に予定していた演奏会と日程的にかなり近いということになりました。以下に、協生館内の藤原洋記念ホールで催される、器楽クラスおよび声楽クラスによる成果発表演奏会の一覧を記しておきます。これらはすべて、感染症拡大防止の措置が取られ、さらには、来場できない方を考慮して、インターネットを通じてライブ配信も行われます。

■慶應義塾大学古楽アカデミー室内アンサンブル演奏会

《17世紀イタリアの奇才、アレッシンドロ・ストラデッラ》

曲目：アレッシンドロ・ストラデッラ（1643-1682）による室内楽作品9曲
出演：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー・室内アンサンブル（ピリオド楽器使用）

全体指導・チェンバロ：石井 明

日時：2021年11月6日（土）16：00開演

■慶應義塾大学コレギウム・ムジクム小合唱演奏会

《フランスバロック期のモテ》

曲目：マルク＝アントワーン・シャルパンティエ（1643-1704）

〈おお、愛よ、善よ、慈しみよ〉他

出演：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム小合唱

（指導：木内麻理子・川田早苗）

日時：12月8日（水）17：00開演

■慶應義塾大学古楽アカデミー・オーケストラ演奏会

《麗しきバロック・オーケストラの響き》

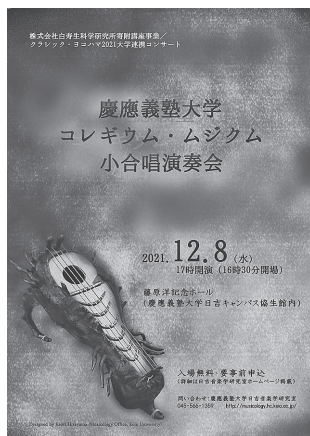
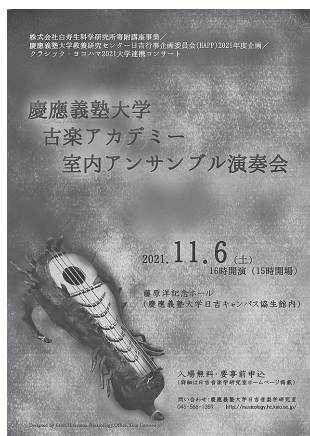
曲目：アンドレ・カルディナル・デトゥーシュ/ミシェル＝リシャル・ドラランド：組曲《四大元素》他

出演：慶應義塾大学古楽アカデミー・オーケストラ（ピリオド楽器使用）

全体指導・指揮：石井 明

日時：2021年12月25日（土）14：00開演

（石井明）



株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座 日吉学「戦争編」：“Doing History?” 日吉キャンパスに愛を

3年目となった日吉学は今年もコロナ禍の中、どのようにフィールドワークの時間を確保するか、授業形式の選択に頭を悩ませる始まりとなりました。緊急事態宣言の合間を縫いつつ、連合艦隊司令部の地下壕見学を実施できたことは学生にとって大きな収穫でした。

初回（阿久澤武史）にキャンパスの戦争遺跡、第二回に慶應義塾史上の日吉・塾生・戦争（都倉武之）を学び、入坑。壕内では上原良司（経済学部1943年入学、45年特別攻撃で戦死）の手記を学生が朗読。当時の学生が戦争にどのような考えを持っていたのか、なぜ日本は戦争を止められなかったのかという疑問がわいたようです。第4回（杵島正洋）と第5回（福山欣司）では地質・自然の観点から、ZOOMでの岩石の実験で地下壕建造が可能となった理由を探り、航空写真の比較で日吉の森とキャンパスの変遷を辿り、驚きと発見のキャンパス探訪につなげました。第7回（太田弘）には戦争末期の日吉と沖縄の時系列から浮かぶ沖縄の海軍壕の悲惨な状況を知り、沖縄タイムズの与那覇里子氏がZOOMで質疑に登場、第8回（安藤広道）には連合艦隊司令部と鹿屋の航空司令部の日単位の動向記録によって両者の密接な関係が照射されました。第9回・10回（大出敦・不破有理）ではアカデミック・スキルズを学び、授業外にSlack上でコメントや参考文献の紹介を受け、学生は発表準備へ。発表の場で受けた教員・学生からの質問を踏まえ、さらに学生は4000字のレポートにまとめ上げました。

日吉学は日吉での教育に愛を注ぐ先生方の熱い思いが集約された授業です。コロナ禍は会話を禁じるという猿轡をかまされたような状況を生み、歯がゆい思いを感じる場面もありましたが、意見の双方向性を尊重し、学生も教員も共に学ぶ「半学半教」の教育の場がなんとか確保できました。恒例の日英バイリンガル版「日吉学修了証」が手渡された場で、学生の皆さんが楽し気に語り合う姿を目にできたこと、そして「受講生のレベルが高く、大学らしい授業だった」「対面で様々な人と日吉について考えられ、友人ができた」「論の立て方や書き方について学べた」さらには「日吉から世界が見えた」という発言まで飛び出したのは嬉しい限りでした。あらためて参加学生の皆さんに、そして教員の皆さんに謝意を表したいと思います。

すでに2022年度にむけて「景観編」のプログラム作りを始めています。日吉学は歴史を追体験し、新たな歴史の担い手を創る学びの場として、これからも育っていくことを願っています。

（不破有理）



身体知胸躍る6日間の冒険—法学部設置科目「人文科学特論Ⅱ」

2021年度の夏に特別集中講座法学部設置科目「人文科学特論Ⅱ」は、2010年度より教養研究センターの極東証券寄附講座として開講してきた「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」の手法を基に開講してきました。2021年度も通信教育部の夏季スクーリングはオンラインとなったために残念ながら通学生のみでの授業となりました。計4名の異なる個性と異なる身体表現を持つ学生たちと過ごした6日間は、講師にとっても発見の連続でした。今年も3つの文学作品を使いました。しかしこれまでは文学作品から着想を得て創作を行っていたのですが、履修者の文学的な表現力が高かったために、各自の創作に比重を置いた授業を展開する方針に切り替えました。同時に文学作品を身体表現（ダンス）やドラマなどの翻案に置き換え、その異なる表現形式の間を自由自在に行き来するという実験的な試みも取り入れ、6日間創造的なコミュニケーションを味わい尽くしました。今回は、文学部の若澤佑典先生がボランティアに参加してくださり、担当講師とは異なる切り口から学生たちの創作にコメントをくださったりアドバイスをくださったことも大きな助けとなりました。

※2021年度「身体知」は法学部設置科目として開講しましたが、2022年度から教養研究センター設置科目としての開講を予定しています。

（横山千晶）

【日吉学】日吉で学ぶということ

慶應義塾大学に入学した暁には、日吉学を受講する。これは私が当初から決めていたことでした。実際に受講し終えた今思うのは、本当に正しい決断だったということです。自分の足で地下壕に入り、戦争を生きた歴史として体感できる機会はそうありません。それも母校で、知識豊富な先生方のもとで学べるのは文字通り日吉学、この日吉キャンパスだけだと思います。私は鹿兒島出身ということもあり元から特攻に関心があったのですが、安易な礼賛や批判に終始しない深い考察をすることができました。そして何より、個性豊かな仲間と知り合えたことが貴重な収穫でした。これらも全て、万全の感染対策のもと出来る限り対面を先生方に続行して頂けたおかげです。この場を借りて謝意を表したいと思います。

（法学部2年 山崎聡子）

【日吉学】日吉の歴史に耳を澄ます

日吉での生活も長いもので4年目になります。大学に進学し何か面白い授業を履修しようとしたところ出会いました。塾高時代、毎日のように第一校舎の正面玄関をくぐりながらもその歴史的背景に触れる機会はありませんでした。しかしいざ調べてみると驚きと発見の連続だったように思います。少人数で多くの先生とともに一つのテーマについて向き合う、慶應の半学半教の精神を反映した授業が増えていけば大学教育は更なる価値を創造出来ると強く感じています。そして多くの人に網戸武夫が描いた理想的学園である日吉が戦争の加害者となりまた同時に被害者となった足跡を知ってほしいと切に願います。コロナ禍でもほぼ唯一といっているくらい対面授業を実現し、常に熱心に向き合ってください先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

（経済学部1年 富田陽介）

日吉キャンパス公開講座 「二刀流の豊かな世界」

2021年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え47回目の開催となり、10月30日から12月11日までの日程を組みました。統一テーマに沿った話題について、日吉キャンパスの教員を中心に研究機関としての義塾が持つ知的情報源を広く公開し、塾内外を問わず幅広い年齢層の皆様へ学んでいただくことを目標としています。2020年度はやむなく中止としましたが、対面での実施にこだわり、4月の時点で開催を決定（テーマや講師陣についても）しながらも、その後の動向を見ながら、日程直前や途中での中止もありうる中での開催となりました。例年に比べ定員を減らし、広めの教室を選び、日程をできる限り遅らせ、また期間も短くするといった対策（無論、感染対策も）も取りました。

コロナ禍という不透明・不安定な状況が続く中、受講申し込みが低調になることも想定されましたが、募集開始3日で定員に達し、盛況となりました。

統一テーマを「二刀流の豊かな世界」とし、10講師（塾内6名、塾外4名）による各90分の講演が行われ、分野は法律・生物・文学・歴史・スポーツ・IT・語学・宇宙・物理・医学・環境・社会問題・職業・キャリア等、特定の分野に偏ることなく多岐に渡るようにしました。

2019年度も「出口戦略とその先の未来」というテーマ決定後に当時の麻生太郎・副総理兼金融担当大臣の「2000万

講義日	講 師	テ マ
10月30日 (土)	3時限目 中道 徹	法と科学の二刀流 —科学から見た法、法から見た科学、そして生命—
	4時限目 福山 欣司	カエルにおける二刀流 —カエルは水陸両用の便利な生き物か—
11月6日 (土)	3時限目 吉田 泰将	二刀流の秘密 —宮本武蔵と五輪書—
	4時限目 逸木 裕	作家業とプログラマー業 〈汎用的な力〉について
11月13日 (土)	3時限目 森林 貴彦	高校野球から考えるスポーツの価値 —小学校担任との二刀流から見えるもの—
	4時限目 馬場 未織	都市と田舎に同時に生きる —「二地域居住」で見えてくる未来—
11月27日 (土)	3時限目 佐々木美帆	バイリンガルの言語と世界 —2つ以上の言語と生きる—
	4時限目 長谷川直樹	人とウイルスの二刀流の戦い
12月11日 (土)	3時限目 松浦 壮	ミクロとマクロの二刀流 —量子と時空が織りなす宇宙—
	4時限目 杉村 太蔵	人生何が起きるか分からない —太蔵流チャンスをつかむ技術—

※公開講座は中止・延期となる可能性があります。

円」問題の言及があり、2021年度についても、テーマ決定後に二刀流の大谷翔平選手の歴史的な活躍があり、同様にタイムリーなテーマ設定となりました。

各回の講演者やタイトルは上表をご参照ください。また「日吉公開講座」で検索いただきますと、過去の実施分についても記載がございます。（寺沢和洋）

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/exchange/open/>

アカデミック・スキルズ10分講義ビデオ

教養研究センター設置科目アカデミック・スキルズでは、自分で問題を発見し・調べ・発信する力を実践的に習得します。その心得をだれでも学べるよう、教養研究センター所員がテーマを設けて約10分語るビデオ講義を制作し、センターのホームページを介して公開しています。2013年度に一度、一連のものが作られましたが、内容・陣容を2020年度に刷新し、新たに15本が制作・公開されました。2021年度も新たに追加され、今後、配信が予定されています。2020年度以前の講義ビデオにもホームページからアクセスできます。学生諸君にとってレポートや卒業論文執筆の参考になるとともに、広く一般に学術研究に臨む姿勢について、指針となることが期待されます。また、リモート学習に資する教材にもなります。この10分講義は過年度に公開された際に、学外からも高い関心が寄せられ、参照の打診

も受けています。（高橋宣也）

10分講義ビデオは教養研究センターのホームページからご覧ください。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

2020年度 春学期公開

研究とは何か？ 小菅隼人（理工学部 教授）
 文献を読む 片山杜秀（法学部 教授）
 翻訳について 高橋宣也（文学部 教授）
 レポートの問いの立て方 鈴木亮子（経済学部 教授）
 剽窃（ひょうせつ）について 池田真弓（理工学部 准教授）
 効率的に情報を探すには 竹田咲子（日吉メディアセンター）

2020年度 秋学期公開

読書術 坂本 光（文学部 教授）
 「君も哲学してみないか」——哲学的思考法——
 斎藤慶典（文学部 教授）
 「調査的面接法の基礎」——質的手法への誘い——
 高山 緑（理工学部 教授）
 Persuasive English Presentations: Three Is the Magic Number
 コミサロフ、アダム（文学部 教授）
 「言葉は身体表現」——英語という言語を捉えなおす——
 横山千晶（法学部 教授）
 「ドイツ語を知り、日本語を知る」——大学生の語学——
 杉山有紀子（理工学部 専任講師）
 「教養の語学」——フランス語—— 原 大地（商学部 教授）
 「中国語」——発音の攻略—— 高橋幸吉（商学部 准教授）
 図書館資料と著作権 今井星香（日吉メディアセンター）

※所属・職位は公開当時のもの

<今後の配信予定>

歴史学——「事象/現象のネットワーク」から人間の営みを考察しよう—— 岩波敦子（理工学部 教授）
 美術史を学ぶ 荒本文果（理工学部 専任講師）
 大学で音楽を学ぶ 石井明（経済学部 教授）
 古典籍（こてんせき）・くずし字
 ——私たちの今を考える材料として——
 津田真弓（経済学部 教授）
 スペイン語の世界——大学で学ぶ意義——
 アルベルト・ミヤンマルティン（経済学部 准教授）
 ラテン語のすゝめ 中谷彩一郎（文学部 教授）
 ※タイトルは変更になる可能性があります。

「研究の現場から」

第31回「日本近代文学におけるホラーの地誌学 ——泉鏡花から震災怪談へ——」

寒村をさ迷う亡霊……幽谷に潜む山人……嫉妬する祟り神……峠道を駆け出す狂人——日本近代文学の中では、イナカという風景はいつの間にか、ホラーという情動と結びつくようになりました。その怪奇幻想文学と地方文学との接点を探りながら、「田舎ゴシック」という観念を通して日本のもう一つ、都会ならぬ近代を考察するのが、現在取り組んでいる研究の目標ですが、本発表では、泉鏡花の諸作品を出発点とし、東日本大震災から生まれた震災怪談とその回復的な可能性を一つの到着点とする、その研究テーマの輪郭をまず明らかにしました。発表の後半では、田舎ゴシック文学論によって浮き彫りになる諸問題の一例として、現在主に柳田國男『遠野物語』（1910年）のいわゆるネイティブ・インフォーマントとして知られる、遠野地方出身の佐々木喜善（1886年～1933年）の初期作品「館の家」（1907年）を検討しました。生前にも死後にも喜善の

小説はあまり評価されていませんが、発表当時の文学的価値観と相容れなかった創作だからこそ、『遠野物語』などによって築かれた民俗学と文学の近代的に整った関係性とは異なった、土俗・ファンタジー・学術的な記述・夢幻などの様々な言説を混合しながら田舎の共同体の内側からの分析と外側からの分析を同時に行うという、新しい試みを生み出すことができたのではないかと主張してみました。当日は質疑応答の時間において様々なご専門の先生方からフィードバックをいただきつつディスカッションを進めることができ、とても貴重な機会となりました。心より感謝申し上げます。

[2021年7月14日（水）Zoom開催]
(ピーター・バナード)



第32、33回 研究の現場から

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、参加者とくだけた雰囲気の中で語り合う催しです。

慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所であるとともに、情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイデアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。(高橋宣也)

■第32回：11月24日（水）18：15～ Zoom開催

林 安希子（商学部）

演 題：幼児教育のエスノグラフィ

■第33回：12月22日（水）18：15～ Zoom開催

武藤 浩史（法学部）

演 題：モダニズム「驚異の年」からほぼ100年（仮題）

※過去の催しはこちらからご覧ください

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php>

「情報の教養学」

2021年度春学期の「情報の教養学」は、オンデマンドで2件の講演を配信しました。元々さらに対面の講演を1件予定していましたが、残念ながら、COVID-19のため、日吉キャンパスで開催することができず、キャンセル（延期）となりました。

オンデマンド配信による講演は2020年度に引き続き、福井健策氏（弁護士）が「オンライン社会を生き抜く著作権」というテーマで30分強の講演を二つ実施しました。1本目の講演は「引用の注意点」という題目で、2本目の講演は「『肖像権』の注意点」という題目でした。共に、具体的な事例を用いて議論する、という形の講演でした。引用に関する講演では、国立大学における式辞、漫画のカットの利用、パロディのために作成したモンタージュ写真といった例を用いて、それぞれが引用として許されるのかを議論しました。そして最後にまとめとして、引用の注意点を6つあげました。後者の肖像権に関する講演では、肖像権に対する法律がないことを述べ、まずはデジタルアーカイブ学会が作成した肖像権ガイドラインを紹介しました。

そして、4枚の画像に対してガイドラインを適用した場合、肖像権侵害になりうるか否かについて議論しました。

2本の合計動画再生回数は延べ983回（2021年7月8日～2021年9月30日）でした。この期間は、動画が限定公開のため視聴が制限され、また期末試験の時期および夏休みと被っていたことを考えると、非常に注目されたことが伺えます。

本稿がみなさんの手元に届く頃には動画は2本とも一般公開され、情報の教養学のホームページ (<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>) から視聴できますので、ぜひご覧ください。また、秋学期は、大学生活、歴史、技術的な側面といった全く異なる観点から講演を3件実施しています。

(高田眞吾)



<p>【情報の教養学】福井健策 30分でマスターする著作権④ 引用の注意点 30分でマスターする著作権⑤ 「肖像権」の注意点 オンライン配信中</p> <p>【HAPP】新入生歓迎行事 笠井毅舞踏公演 10月13日（水）ライブ配信、12月24日（金）オンライン 配信予定</p> <p>【実験授業】ゲーム学 1回目：10/15（金）、2回目：10/26（火） 3回目：11/9（火）、4回目：11/30（火） 5回目：12/14（火） 18：15～19：45</p> <p>【日吉キャンパス公開講座】二刀流の豊かな世界 1回目：10/30（土）、2回目：11/6（土） 3回目：11/13（土）、4回目：11/27（土） 5回目：12/11（土） 13：00～16：15、日吉キャンパスD101教室</p> <p>【株式会社白寿生科学研究所寄附講座事業】 大学連携コンサート 12月8日（水）17：00～、12月25日（土）14：00～ 協生館・藤原洋記念ホール</p> <p>【情報の教養学】杉浦孔明 演題未定 12月22日（水）16：30～18：00、来往舎1階 シンポジウムスペース</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第8回：宮本万里 「『いま言葉で息をするために』を読む（3）」 ：歴史・宗教・人類学 12月24日（金）16：30～18：30、オンライン開催</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第10回 2月25日（金）16：30～18：30、オンライン開催</p>	<p>9月</p> <p>10月</p> <p>11月</p> <p>12月</p> <p>1月</p> <p>2月</p>	<p>【基盤研究】文理接続プロジェクト第5回：沼尾恵 コロナをきっかけに考えるロボットとのセックスと 恋愛 9月24日（金）16：30～18：30、オンライン開催</p> <p>【HAPP】ライブラリーコンサート2021 10月15日（金）、10月20日（水）15：00～ 日吉図書館1階ラウンジ</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第6回：荒金直人 「『いま言葉で息をするために』を読む（1）」：思想 10月29日（金）16：30～18：30、オンライン開催</p> <p>【情報の教養学】伊藤公平 塾生としての理想の追求 11月10日（水）16：30～18：00</p> <p>【HAPP】日吉音楽祭2021 11月6日（土）16：00～、11月14日（日）14：00～ 協生館・藤原洋記念ホール</p> <p>【研究の現場から】第32回：林安希子 「幼児教育のエスノグラフィ」 11月24日（水）18：15～、Zoom</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第7回：小菅隼人 「『いま言葉で息をするために』を読む（2）」：文学 11月26日（金）16：00～18：00、オンライン開催</p> <p>【情報の教養学】岩波敦子 歴史学の情報戦略 12月1日（水）16：30～18：00 来往舎1階 シンポジウムスペース</p> <p>【研究の現場から】第33回：武藤浩史 「モダニズム『驚異の年』からほぼ100年」（仮題） 12月22日（水）18：15～、Zoom</p> <p>【教養研究センター選書刊行記念企画】 1月14日（金）16：30～</p> <p>【基盤研究】文理接続プロジェクト 第9回 1月28日（金）16：30～18：30、オンライン開催</p> <p style="text-align: right;">※活動予定は中止・延期となる可能性があります。</p>
---	--	---

私の前屈自慢

もっと体が柔らかい方はたくさんおられることでしょう。でも、私のかつての体力測定では、立位体前屈がマイナスの数十センチ、つまり必死に伸ばした指の先が床からほど遠い中空にある、という有様でした。それに比べれば、かなりの進歩です。

身体の硬さもあってか、10代後半から時々ぎっくり腰に襲われ、次第に慢性的な腰痛に悩まされていきました。30歳を過ぎたころ、ヨガが腰痛によいと聞いて始めました。

太陽礼拝という基本セットを、就寝前にやっています。最初は、特にダウンドッグと呼ばれるポーズを取るのに、恐怖すら覚えました。今では、毎晩気持ちよくこなしています。腰痛も軽減され、たまに腰に鈍痛を感じる際には特に腰痛に効くヨガを取り入れて、ぎっくり腰を予防しています。

昨今のステイホームの影響もあってか、今、インターネットには良質なヨガレッスン動画があふれています。基本的にはヨガマットさえ用意すれば、基本動作からもっとハードなもの、あるいは目的別にさまざまなヨガの流れを学べます。ヨガには、呼吸を整えて心を落ち着かせる作用もあります。座り仕事が多いと拝察される皆様も、一日少しずつのヨガをお試しく下さい。続けると、きっとよい効果があるはずです。

（文学部 辻秀雄）

